

資料翻刻

松の屋旧蔵『湖月抄』の書入れ注記

—— 藤井高尚の源氏物語研究 ——

工 藤 進 思 郎
小 橋 和 恵

本稿は、岡山大学附属図書館所蔵の藤井高尚の手沢本『湖月抄』（六十冊）に施された付箋による書入れ注記について、そのすべてを翻刻したものである。この書には、各冊に「中山麓松適屋」という高尚の蔵書印があり、書入れ注記のほか、桐壺から夢浮橋に至る全巻に朱筆で校異が施されている。とくに桐壺・帚木の二帖においては、「貞」・「古」・「イ」・「一本」・「三」などと略記された諸本との校合の跡が詳細に書き込まれており、そのうち「赤穂三木氏ノ本」（略号「三」）が河内本であったことは注目に値する。なお、桐壺巻の見返し部分に、後人の手で「源氏ノ見様」と題する一文（六百字余）を記した紙が貼りつけてあるが、今回は紙面の都合で、この一文と朱書校異については割愛した。

付箋による書入れは二十二帖にわたって約七十ヶ所に

見受けられ、帚木巻の一部に高尚の養孫高雅（高校）によって加えられたものがあるほかは、すべて高尚自筆の注記である。語釈・語法・文意・引歌・有職故実等、その内容は多岐に及んでいるが、総じて文意の解明に最も力点を置くとともに、『湖月抄』や『玉の小櫛』などの所説に対する鋭い批判が随所に見受けられる。また、高尚門として知られる清水宣昭・東条義門・武藤平道らの見解を、積極的に取り入れている点も注目されよう。文政九年（一八二六）に成った「文のしるべ」（『三のしるべ』所収）や、「文あはせ」（文政七年刊）の奥に掲げた「松乃屋藤井高尚大人著述目録」等によれば、高尚に「源氏物語新釈 六十冊」を著わす計画のあったことが知られるが、それは松の屋一門の叡知を集めての大事業であったに違いないからである。そしてこの書入れ注

記や朱書校異が、ただちに「源氏物語新釈」に繋がるものであったとは考えられないにしても、そのための基礎作業がまずこういう形で進められていたことは、もはや疑うべくもないであろう。しかし、高尚はやがて死去し（天保十一年）、その遺志を継いで筆をとった高雅もまた業なかばにして倒れる（文久三年）に及んで、ついに「源氏物語新釈」の稿は成らなかったものようである。それだけに、この手沢本『湖月抄』の書入れは、本居宣長との間に交わされた問答録『源注問答』（現存三冊）や、ユニークな準輿論を展開した『日本紀の御局の考』（文化十年刊）などとともに、高尚の源氏研究を知り得る貴重な資料と言わねばならない。

なお、本書における高尚の書入れ注記は、その晩年に至るまでかなり長年月にわたって随時加えられたものと思われるが、関屋巻の付箋に、「今は六十の老となりぬれば」と書かれているのによれば、少なくともこの一葉の執筆は、高尚が六十歳を迎えた文政六年（一八二三）ごろであったことが判明する。

凡 例

翻刻にあたっては、原文をできるだけ忠実に活字化することに努めたが、次の諸点に一部手を加えた。

1 見出しの項目を欠くものは、『湖月抄』の本文によって適宜項目を立てたが、その場合は必ず「」でくくった。

2 見出しの項目の下に、『湖月抄』の丁数表裏と、『源氏物語大成』校異篇の頁数（漢数字）・行数（算用数字）を掲げた。

3 表記に關して、漢字・平仮名・片仮名などはすべて原文のままにしたが、異体の文字は現行のものに改めた。

4 濁点を欠くものはこれを補うとともに、新たに句読点を加えた。

5 藤井高雅（高枝）によって加えられた付箋には、その項目の右肩に米印を付した。

6 本文中のどの箇所かの付箋が判明しがたいものも二、三あるが、これらは各巻の終りに掲げて、その旨を注記した。

桐 壺

「うちはし」（5木・七・6） はたものゝふみきもてきて
天の川うちはしわたす君がこむため 万葉ニアリ。
かゝるほどにさぶらひ給ふ例なき云々（8木・九・12） か
くいへるを、むかしより服忌の事と人のこゝろえた

るは、ひがごと也。ちごなるからにさぶらひ給ふれないなしとはいへる也。そは栄花物語浦々のわかれの巻に――、大鏡五ノ巻に――とあるなどを見てしるべし。

栄花物語浦々のわかれの巻　みこたちは御対面とて、いつゝなどにてぞむかしは有ける。また、うちにちごなどいるゝ事なかりけり。されど今の世はさもあらざめり。

大鏡五ノ巻　むかしは、みこたちもをさなくおはしますほどは、うちずみせさせ給ふ事なかりけるに、このわか君のかくてさぶらはせ給へば、あるまじき事とそしり申せど。

「三位のくらゐ」(9オ、一〇・8)　原云、二三位典侍号上臈。着赤青色候御倍膳也云々。大臣女或孫。同云、公卿女号小上臈云云。公達云云諸太夫公卿孫、為小上臈。同云、内侍外不着織物云云。昔号命婦侍臣女ワ下也。諸太夫良家ヨリ下医陰陽道等号中臈。八幡ノ別当女同凡一切者多中臈ノ品也。同云、諸侍賀茂日吉ノ社司等女也。称候名云云。其内宿老ノ者或賀茂祭為命婦云云。

としごろうれしく云々(13オ、一四・1)　湖月抄の説くはしからず。更衣の里の家にて、更衣と更衣の母とは、

異所にすみたまへば、更衣のかたへうれしくおもだゝしき御使あるそのついでに、母のもとへもたちやり給ひしと云意也。

すゞむしの云々(14ウ、一五・7)　玉小櫛に、此でもはつねに云てもの意にはあらず云々とかれたるは、うけがたし。つねに云ても也。命婦の声のかぎりをつくしてなければ、長夜には泣あくべき事なるに、しかしでもなほあかず泣事よと云意を、ふる涙かなとはいへる也。小櫛に、後京極殿の歌をひかれたるも、たがへり。これも、月やあらぬとかこちても猶すみすてずしてたれ云々といへる意也。

亭子院の云々(16オ、一六・6)　これは亭子院にとありしを、にをのにうつし誤れる也。小櫛ノ説もわろし。

とのる申の事(18ウ、一八・5)　西宮記ニ、大將以下少將已上宿候之中至其上臈之在所々申也殿上及宿所等也云々。北山抄ニ、亥子時左陳毎剋夜行丑寅剋右陳剋之云々。たゞ人にはいとあたらしけれど(23ウ、二一・10)　抄に、

天子の御事にかけていへるは、ひがごと也。天子の御事は、こゝにさらになき事也。親王は天子にならびて君たる御方にて、御歴々なれば、ぎえかしこくおはしなばひときはめでたければ、たゞ人にはあたらしといへる也。

帝木

「ひかる源氏云々」(2オ、三五・1) 清水宣昭云、ひかるげんじと云より、わらはれ給ひけんかしといふまでは、玉小櫛に見えたる如く、此物語一部の序の如し。さて、其序文を此巻のはじめにしもかけるはいかにといふに、まづ桐壺巻には、父帝母御息所の御事より書はじめ、それより源氏君うまれ給ひ、つぎ御元服葵上の御事などありて、大かたおとなになり給ひて、事も業もこれよりくはしう語り出るなれば、まことに一生をとりすべて評したる序文の如きは、此はじめにあるべきわざ也けり。さこゝろえて見ざれば、この文いかにぞや思はれて、さばかり心を用ひたる作者の心しらひも、いたづらになり侍るべし。此説イトヨシ。

* さがなさよ(2オ、三五・3) サガナサハ、コ、ニツカハルハアツカマシト云ニアタルカ。こゝにしも何にほふらん女郎花人の物いひさがにくきよに コレモオナジ意ナラン。

* なよび(2オ、三五・4) は、ナヨ、カ・ナヨ、ナヤムナゾ云トオナジ事ニテ、タハトヤハラカナルカタチナルベシ。源語梯二色メクナリト云ルハ、コ、ニハアヘレド、オシテオモフベキ説ナラズ。ナ

ヨビノヒハ、ヒ・ヒ・フル・フレトハタラクナルベシ。桐七ノオ イトマナヨトワレカノケシキ。

* 「心づくしなる」(2ウ、三五・8) 古木の間よりもりくる月の影みれば心尽しの秋は来にけり 心尽しは、

俗に氣をもむといふに似たり。 高枝曰

* あやにく(2ウ、三五・9) 梯ニイデワロクト説ル、カ、ルトコロニハヨクカナヒタリ。

* ふるまひ(2ウ、三五・9) は、俗語にいふと同じきが如し。今しなしといふにあたるべし。 高枝曰

* あへず(3ウ、三六・5) ハ、カクサントハオモヘド、カクシカネト云意。ナカレモアヘズ・風モ吹アヘズノ

タグヒ、カネルト云コ、ロナリ。 高枝曰

* つれづ(3ウ、三六・5) スベキワザノナクテ、ヒマニテサビシキ也ト、鈴翁ハイヘリ。

* そのかたをとりいでむ(5オ、三七・9) そのかたは、それはそれほどの場合でといふが如し。さるかたにてすてがたきものとあるは、これも少しの差別はあれど同じ。 高枝曰

まぎるゝ事なきほど(5オ、三七・13) 湖月傍注ハワロシ。サテハはかなきさびトアルニカナハズ。コハマダ若クシテ、男ナドモセデ、其方ニマギル、事ナキコ

、ロナルベク思ハレ侍ル。宣昭説ナリ。

我も(5ウ、三八・4) 義門云、もノ下に、ともじ落たるべし。さなくては、みづからもとあるべき也といへり。此説いとよし。

けしうはあらぬ(7オ、三九・8) は、けは異にて、あやしからぬ也。賤しきをあやしといへば云云。物のさしもあしからぬを云云。 鈴翁ノ説

アヤシノ山ガツ、アヤシノシヅナダアリ。

「非参議の三四位ども」(7オ、三九・9) イマダ参議ニ任ゼズシテ、公卿ニアラザル三位四位ノ人ヨイヘリ。ツネハ位ヲ以テ三位已上ヲ公卿トスレド、コ、ハ官ニツキテ参議已上ヲ公卿トシテイヘル也。

やすらか(7オ、三九・10) 高枝曰、オモシカラズ人アヒヨキ也。今ノケンシキブラヌト云ガ如シ。

我＊いもうと云云(8ウ、四〇・13) 物もいはずト云迄ハ、記者ノ語ニテ、上ニイトキ、ニクキ事オホカリトアルト同ジ意ニテ、コ、ハ式部ガ詞イダサヌコトワリ口チ也。コノ下、君ノウチネブリテコトバマゼ玉ハヌヲサウムシクトイヘルモ、記者ノ語ナラネド同意カ。

「女にてみたてまつらまほし」(8ウ、四一・3) 手習ノ巻きの守、小野の尼のもとにてとはずかたりする

詞に、

兵部卿の宮ぞ、いといみじくおはするや。女にてなれつかうまつらばやとなんおぼえ侍る。

おほどかに(10オ、四二・7) 句ギリナルベシ。

びさうなき(10ウ、四二・14) 土佐人武藤平道云、これは見ぐるしうないと云意なるべし。沙石集に、サテ彼仏御ウナジノ貧相ニ御坐スヲ、上人仏師ヲ呼テナホサシメントスル云々と見えたるも、仏の御うなじの見ぐるしきを、貧相といへるにて、しるべしといへり。此説よし。見ぐるしきを貧相と云しは、そのかみの俗語なるべし。平道と云は、高知の里に住て、歌よみ文かき、このまなびにふかく心いれて、おのがもとにもふみかよはして、ものとひなどする人になん。

「つながぬふねの云々」(14オ、四六・5) 白氏文集 偶

吟詩 無情水任方円器、不繫舟随去住風。

「きこえさせつる云々」(17オ、四八・8) 高雅曰、きこえさせつるは、自然に心をさめらるゝやうに侍りしといふへ、かけてみるべし。上文に、多くは我心もみる人からをさまりもすべしといへるをさして、きこえさせつるやうにとはいへる也。

「もとより思ひいたらざりける」(17ウ、四八・14) 高雅

云、もとより思ひいたらざりけるは、いさゝか心得たる事のうらにて、ふつふしらぬ事といふ意なるべし。

〔我だけくいひそし侍る云々〕(18ウ、五〇・3)

若菜上七十三 よしめきそしてふるまふとはおぼゆめれど。

寄生卅八 ひきたがへ心えぬまでこのみそし給へる。

明石廿 人々に酒しひそしなどして。

初上^(秋カ) 四十八 お前にて御琴給はりてせめそさせ給へるにこうじにたりや。

クニ中^(上カ) 四十五 かんだうしせめこのかみともいはずせめそせよとの給ひて。

落クボ しそしつ。

アゲマキ 廿八 老人どもはしそしつと思ひて。

そやすナドオナジキニヤ。

我ダケクハ、勝手ヅラト云意也。

見ダテ メダツノ他ヨリ云事。

わりなくくるしきものと(26ウ、五七・9) これはあるま

じきことをするやうにて、きがつらいと云意也。

〔さればかの云々〕(27ウ、五八・4) 三本止帖に云、され

ばかの云々より、又わびしかりぬべけれといふまでを、みな馬頭の語とすべし。小櫛の説はわるかるべ

し。馬のかみものさだめのはかせになりてとあるより、すべて女のよしあしをいふは、みな馬のかみなり。いかで此わたりのみ、中将の語もまじれりとすべき。琴の音すゝめりけんとなるは、馬の頭のおのがきゝしにはかなはぬいひざまなれど、おのが事も中将の事も、ものさだめのはかせのうへよりは、わきなくいへるなりといへり。此説よろしかるべし。

〔こしをれ文〕(29ウ、五九・11) 宣昭云、紫式部日記に、

やゝもせばこしはなれぬばかりをれかゝりたる歌をよみいとあれば、本末つゞかず、末のわきのかたへをれかゝり、ゆがみたる如きさまの歌をいふ也。

ふみに、こしをれといふは、歌よりうつりていへる

事なるべし。

平家ニ、常磐清盛ニササメラレテ云云。源氏ニ、ムベワレヲパスサメタリト、ケシキドリエンジ云云。荒ノ字ヲアテタリ。又遊、又翫、又進モアテタリ。古今ニ、山高ミ人モスサメヌサクラ花イタクナワビソワレミハヤサン大アラキノ杜ノ下草老ヌレバ駒モスサメズカル人モナシロスサミ・手スサミ・吹スサム・降スサム・彈スサム。万葉ニ咲スサルトモアリ。考ルニ、詞ノ元ハ進ノ意ナルベシ。物語ナドニツカヒタルハ、大方ハ心ヲ入レズシテ、アソビ事ノヤウニスル事ノ也。

△稿者注△ この「平家ニ云々」の付箋一葉は、帯木巻27ウに貼付されているが、同巻に該當箇所は見あたらない。

夕顔

かしこまり申（4オ、二〇二・10） コレハ冊子地ヨリ惟光

がサマヨイヘルナリ。

若紫

「はるかにかすみわたりて云々」（4オ、一五二・13）

はるかに霞わたりてト云ヨリ、けぶりわたれるほどト云マデハ、地ノ詞ナガラ、源氏ノ君ノマノアタリ見タマフ心ニナリテ、サテ其心ヨリ、タマニ詞ニツマケテ、絵にいと云々トイヘリ、ト宣昭イヘリ。

「なげの御ことの葉」（36オ、一八一・4） なげハ、なさ

けノさヨ、ウツシオトセルナラン。なげハコ、ニカ

ナハズ。

高尚考

末摘花

「くもりがちに待めり」（5ウ、二〇四・4） さきに、

ものゝ音すむべき夜のさまにも侍らざるにとある首尾なり。すべて弾物は、雨はもとより疊りたる時も、音のよからぬものにて、かくいひて琴をやめさせまゐらする也。たゞふと空の事をいひ出してはいかゞなり。但し前に、御琴の音いかにまさり侍らんと思ひ給へらるゝ夜のけはひにこそはれ侍りてなん

とあるは、そのかしまゐらする詞なれば、実景とは別也。

「いかなるやうぞ云々」（12ウ、二〇九・8） いかなるや

うぞは、末摘君のつれなきやうすはいかやうのやうすぞと云意也。いとくる事こそまだしらねとの給へるは、さやうにつれなき人のあるべくもなし、命婦の媒の取向のわろきゆゑならん、と思ひ給ふ下の心あり。それをかきあらはして、ものしと思ひてのたまへばとはいへる也。さるゆゑに、命婦の気毒に思ひて、媒の取向のわろきにあらぬわけを、次に云也。源氏君と末摘君の御中は、もてはなれてにげなき御事にあらず、御文の御返事もありてよからんといふやうに取向オモケ侍ルしました。されども、何もふかきゆゑはなけれど、唯一大カガとほりの御ものづくみのわりなきに云々といへる也。たゞ大かたは、別に子細のなきをことわる詞也。もてはなれて云々、抄の説はたがへり。

鼻の色にいでて（28オ、二二三・9） 花ト云字ヲアテテ、

鼻によそへてトイヘルハタガヘリ。又、のたまふト云モタガヘリ。

「げにしなにもよらぬ」（29オ、二二四・6） げにハ、雨

夜物語の馬頭の詞ヲウケテイヘルナリ。

ありし色あひ云々 (33ウ・二三七・9) 末摘君の御方の人々の心也。命婦にあらず。

「御ぜん」 (33ウ・二三八・2) 御前トカキテ、おまへトカ、おはんまへトカヨミケンヲ、ウツストキニ今ノ言語ニヒカレテ、御ぜんトカキシナラン。

高尚云、一本に、さこそあれなとあるぞよき。なは強意の詞のそへるにて、こゝによくかなへり。

△稿者注△ この「高尚云」の付箋一葉は末摘花巻末に、後人の手になる左記の別紙とともに挿入されているが、該当箇所を明らかにしたい。

△別紙△ 此高尚云トフル紙切レ虫千ニ風吹散ス。末つむ花の上六ノ巻ノ上ニアリ。万一此近辺ノ部ヨリ紛入ニハナヤカ。近辺ハ、よもぎふ、もみちのが、まつ風、せき屋、花のあん、あふひ、身をつくし、ああはせ。

紅葉賀

人ものいひも云々 (15ウ・二四八・11) 傍注、藤壺の御心也といへる、非也。源氏ノ君の御心也。物からと有詞よりのつゞきを見るべし。下に、心づきなしとおぼす時も有べきをといへるは、上ノ九丁ノ右六行に、心とけぬ御けしきもはづかしうとありて、命婦も今は心やすくもえたばからねば也。

げに (15ウ・二四九・2) コレハ、常二人ノナラビナキド

チハ似タルモノ也ト云事ノアル故、ソレヲウケテ、げにトイヘル也。

葵

かくこよなき (13ウ・二九二・11) 前の御車あらそひの所に、さばかりにてはさないはせそといへるに、あたり。

れいならぬ旅所なれば (16ウ・二九四・12) 雨夜物語に、内わたりの旅ねもすさまじかりぬべければとあり。遠き所ならでも、家をはなれて外にあるを、旅云々といへり。

賢木

いとあまりうもれいたきを (3ウ・三三四・4) アヒ奉ラジト、アマリヒキコメタルノ甚シキヲ云。抄タガヘリ。

あはれがりも (8ウ・三三八・11) 斎宮のいとわかきを、えはなれたまはぬを也。

くにつかみ云々 (9ウ・三三九・7) 一首の意、国つ神を我御身になして、母御息所と君の御中を、そらにとわるべくば、先づこれまで母御息所をなほざりにし給ひたる事を、たゞすべしと也。我御うへならねば、おほらかになほざり事とはいへる也。次に、宮の御返りの云々とあるも、そこをおぼす也。

こまやかににけり(38ウ、三六四・4)とは、某云、いはちやき世をおそれ給ひて、おちらん事もうしろめたく、何方へもなさけなからぬほどに返事し給ひて、言ずくなるに、これはをりも哀に、あながちにしのびかき給へらん御心ばへも、にくからぬゆゑに、言ずくなにと思ひ給へども、こゝろのかよふならば云々と、せちなる情を、歌のみかは、詞にもかきのべ給ひて、こまやかににけりと云意也。

須磨

なまさかしき人の云々(48ウ、四三五・1) 高尚云、上巳のはらへ陰陽師のなすわざにして、そのかみ、まだよき人のもてあつかひたまはぬ事なれば、さることやうなるわざし給へと、まことにさかしき人の聞ゆべきにあらず。しかしたまへと聞ゆるをば、紫式部のこゝろに、よき事とおもはぬすぢゆゑに、なまさかしき人の聞ゆればといひ、源氏ノ君の御心にも、しかすべき事とは思ひたまはぬよしにいへる也。されど、身のうきまゝに、もしやしあると思ひ給ふ心もまじり、海づらのゆかしきかたもくはゝりて出給ふよしにて、うみづらもとはいへる也。こゝろをとどめて見るべし。

此国にかよひける云々(48ウ、四三五・2) 高尚云、陰陽

師は国々にもある事なれど、京のはすぐれたれば、京より此国にかよひける陰陽師に、はらへせさせ給ふよしなり。諸説みないひたらず。

明石

恋しうおぼつかなき御さまを(8ウ、四四六・2) 高尚云、おぼつかなしと云詞は、待遠なるこゝろ、又は見まほしく思ふこゝろにつかふ詞也。こゝは、恋しう見まほしく思ふ御さまをと云意也。

はかなき事をもかつ見つゝ(10ウ、四四八・1) 高尚云、

はかなき事とは、かるき小事をいへり。大事はいふにおよばず、小事をも度々見る／＼よはひかさねて、我よりは年たけたる人は、何事も功者なるものなれば、なびきしたがひて云々といへる也。老人は、大事小事に度々あふものなれば也。こゝは、明石入道は源氏君よりよはひまされる人なれば、そのいふ事にしたがはんとおぼすみ心のうちをかける文也。湖月抄に一説とて出せるぞよろしかりける。されどいひたらず。玉の小櫛の師説は、いたくわるし。さて、はかなき事をもといふものでにをはにも、かつといへるにも、みなかなはず。

蓬生

よりこざりければ(6ウ、五三・12) 高尚云、此詞は、

ありし御しつらひかはらずといふへ、かけて見るべし。盗人のよりこざれば、庭はあれども、しん殿のうちのうどはうせずして、さすがにありし御しつらひのかはらざるよし也。

関屋

いかでかすぐし給ふべきなどぞ、あいなさかしらやなどぞ侍める（今、五五・一・七） 高尚云、こはもと、さかしらやとぞ侍めるとありしを、上のなどと見まがへて、うつしひがめたる事うたがひなし。紫式部のいかでかかゝるつたなき文をかくべき。おのれ、まだいとわかりしほどより文を好み、此物語の文をば、ことにふかくしんじて、くりかへしよみあちはひつゝ、年を経て、今は六十の老となりぬれば、うつしひがめたる所をも、大かたはかく見つくるになん。上のぞは、いひすてゝ心をふくめたるぞにて、いかでかすぐし給ふべきなどぞ、いろ／＼うらめしげなる事どもいひける、といふ意をふくめてかきさして、さてそれは、あいなさかしらやとぞ、かたりつたへてござりまするやうすじや、といふ意也。あいな云々は記者の語にて、さかしらとは、こさしく利口だてするころをいへり。湖月抄の頭書の説ともよろし。

櫓

このさかりにいどみ給ひし女御更衣（14才、六四九・一）

高尚云、このとは、女御更衣をさしていへるにて、さかりは、人のよはひの盛にはあらず。さかりにいどみ給ひし、とつゞきたる詞にて、いどみ給ふ事のさかりなりしを、思ひ出給ふ源氏ノ君の御心のうちをいへる文也。細流の説、いたくわろし。さて、いどみしとある本はよからず。ふるき写本に、いどみ給ひしとあるぞいとよき。

乙女

参給にしも（14才、六七五・三） 宣昭云、参給ひしにもノ

誤なるべし。

風にちる云々（56才、七一・13） 高尚云、此歌は、ちりくるもみちははろくあだなるものなれば、見よとのたまひおこせても、いな見じ也。それよりは、つばのみどりそふ木の色を、うごきなき岩ねの松にかけこそ、とし／＼久しく見侍らめと云意也。春の色を花也といへる説は、ひがごと也。かくるとは、紅葉をはなれて松にかかる意にて、いはねの松にかけ春の色を見侍らめと云意也。

玉鬘

いみじきことを云々（13才、七七・13）

高尚云、太夫の

監にしられじとにげて京にのぼるは、たはやすからぬ事なれば、しかせんと思ひかまふるを、いみじき事とはいふ也。

初音

あたらしき年の云々（9才、七六八・10） 高尚云、こゝは俗語に、年明の改事、新年の傍動など云語勢に同じ意也。さて、源氏ノ君の思ひ給ふ心のうちをいへる所なれど、記者ノ語にかきて、御とはいへる也。このさわがれは、源氏ノ君の方につきいへる語也。とやかくやといひさわぐは、御方々也。紫上にかぎるはわろし。

行幸

かたきいはほも云々（28ウ、九〇九・4） 高尚云、此所より、廿九丁ノ右二行、中将もあまのいは戸云々とあるまでの文意を、昔より心えたる人なく、湖月抄の諸説みなときえず。こゝは少将も中将も、近江ノ君に、さやうにはらだちたまはず時節をまちたまへと、異見したまふ意也。中将もとあるにて、その意聞えたり。さるを、少将はなぐさめてのたまふを、柏木は云々とおかれたるなど、いみじきひがごと也。さて此わたりを、とりすべて今こゝにとくべし。
此こそ下にはとある本は

若菜上

おとれり。古本
になきぞよき。と云所にて、句をきりて、よからめと云意をいひのこしふくめたるてにをはと見るべし。こそはとある本にてもいひのこしたる意は同。かたきいはほも云々とは、天照大御神のみしわざにたとへて、近江ノ君の女にていかりたまへるさまを、ことごとくしたはむれいひたる也。天照大御神に似たれば、かの大御神のごとく、いまより思ひかなひたまふ時もありなん、御心をしづめて時節をまちたまへ、といへる也。そは天照大御神いかりたまふものから、時節をまちえたまへば也。中将も天の岩戸云々とのたまふも、天照大御神のごとく時節をまちえたまへと云意也。近江ノ君は、こたみ我を内侍督になしたまへといひて、ならぬをうらむるを、少将中将は、時節をまちたまへとのみ、たはぶれ事にのたまふゆゑに、此君だちさへみなすげなうとは、近江君のいへる也。旧説に、兄弟の事ゆゑ、たとへたるよしにとけるも、たがへり。少将中将、何も近江ノ君がためあしきわざし事なく、須佐之男ノ尊とは似つきもせぬ事也。たゞ女にていみじういかりたるを、たはぶれに天照大御神にたとへたる也。さるからに、はぐみみていひるたまへりとはかける也。

かくみに近きほどながら(84ウ、一〇九九・3) 高尚云、

尼君と入道とは又なくちぎりふかくたのみし中なれば、遠国ならば格別ちかき所にありて、なかくわかるゝやうの事はあらじと思ひしに、所は明石にて、そのわたりの山といへば、みに近きほどながら、などかくてわかれぬらんと云意也。さるは、須弥の山にいら、又もおとづれせず、あひ見じと、いひおこせたれば也。

若菜下

「ねうく」と(6オ、一二八・11) 高尚云、猫のなく

声を、ねうくとかき、鳥の鳴く声を、かうとかけるたぐひ、すべて其声を、おほよそにまねびて、人のきゝよきやうにかける也。むかし人として、きく耳のたがふ事はあるべき。にやをくかあとかきては、つまりてわろければ也。障子を、さうじとかくに同じ。

なにをさくらにといふるごと(72ウ、一一八七・9)

高尚云、こゝにて句をきりて、此詞は上につきたる詞と見るべし。あるはかゝる人の云々と心えざれば、聞えがたし。

横笛

「御袖をひき云々」(5オ、一二七・10) 高尚云、御袖

をひき。と句きりて、まつはれ云々とよむべし。古歌に、はひまつはれよといへるまつはれに同じ。俗に、つきもつるゝと云心也。

椎本

宰相君の云々(4ウ、一五四八・14) 宣昭云、薫君のちか

きゆかりにて見まほしげにし給ふさまに見ゆれど、姫君たちはさしも思ひよるまじかめりといふにて、薫君のおぼすさまを思ひ給ふ八宮の御心也。もし孟の御説の如くならば、宰相君をとあるべし。又、見まほしげとあるも、薫君のさまを思ひ給ふにてよくなへり。又、小櫛に、此まいてと云詞心得がたとあれど、これにてよく聞えたり。

東屋

磯前八十之湊 今近江国坂田郡彦根ニ近キ所ノ海辺ニ磯崎村アリ。磯崎大明神ト云杜モアリ。倭建尊也ト云。

又、同彦根ニチカキ処、八坂村ト云アリ。海辺ナリ。

コレ八十ノ湊也ト云伝フ。

ヒコネハ犬上郡、イソザキハ坂田郡也。コノイソザキニ今ハ閨屋アリテ、美濃ノ下笠ト云ヨリ京ヘムナギヲノボスニ、コノイソザキマデ、カチ荷ニテナヒ来リ、サテコノイソザキヨリ大津ヘ舟ニテヤリ、大津ヨリ京ヘ又カチニテヤル。カバヤキノ直貨キモ

コトハリ也。

〔稿者注〕この「磯前八十之藻」に関する付箋一葉は、東

屋巻末に挿入されているが、該当箇所を明らかにしがた

い。

（工藤）本学法文学部助教授、小橋（昭和五十二年
本学大学院文学研究科修了）

研究室受贈圖書雑誌目録Ⅱ

金沢大学語学文学研究 第九号

金沢大学法文学部論集文学篇 第二十六号

鎌倉時代語研究 第二輯（広島大）

紀要 第四十二号（相模女子大）

紀要 第四卷第一、二号（信州大学医療技術短大部）

紀要文学科 第四十三号（中央大）

教養部論集人文科学篇16（金沢大）

金城学院大学論集 第七十七号（国文学編第二十一号）

金城国文 第五十五号（金城学院大）

近代文学論集 第四号（日本近代文学会）

芸術わらべうた歌詞集（広島女子大）

研究紀要 第十号（花園大）

研究と資料 第四号（早大文学部辻村研究室）

研究論集 第七号（開成中学校・高等学校）

言語文化 第十五号（一橋大）

高知大國文 第九号

高知大学学術研究報告 第二十七

甲南国文 第二十六号（甲南女子大）

甲南大学紀要文学篇33

高野山大学論叢 第十四卷

国語学研究（東北大） 第十八号

国語教育 第四号（富山大）

国語と教育 第八号（大阪教育大）

国語国文 第二号（愛知淑徳大）

国語国文 第十五号（東海学園女子短期大）

国語国文 第十六号（ " ）

国語国文学会誌 第二十二号（学習院大）

国語国文学会誌 二〇号（福岡教育大）

国語国文学誌 第八号（広島女学院大）

国語国文学研究 第十四号（熊本大）

国語国文学報 第三十四・三十五集（愛知教育大）

国語国文論集 第八号（学習院女子短期大学）

国文 第九号 二冊（大谷女子大）

国文学 第五十五号（関西大学国文学会）

国文学会誌 第十四号（京都教育大）

国文学会誌 第二十二号（新潟大）